

# 問い続ける

杉村 芳美

コロナ禍で、仕事の世界には大きな影響が出た。仕事を失う、休業・時短を求められる、これまでの仕事の仕方、働き方ができない。これらが社会全体で起こった。それによって、人々の関心は否応なく働くことへと向かった。働くことの意味についても、ふだんは隠れていたものが地表に現れた。

休業や時短、自粛の要請で、働く機会を失い、収入の源が奪われる人々が出た。主に、人との接触を伴うサービスの業種・職種、すなわち飲食業、小売業、観光業、イベント関連、エンターテインメント関連などにおいてである。働く機会の喪失は、生活の困難に直結した。特に、非正規・女性労働に影響は大きかった。仕事をもつ、収入の獲得機会、生活の手段としての経済的な意味があらさまになった。それゆえ、公的な支援として、給付金・補助金・支援金が不十分ながら給付された。

とはいえ、働く機会の縮小・喪失は、働くことの経済的意味とは別の側面も見せた。飲食業では、食を楽しむ機会・交流社交の機会を提供できないという言葉があった。観光業では、客をもてなす、喜ばすことができない、イベント、エンターテインメント関連では、表現機会、共感の機会と場が奪われた、などもしばしば耳にした。つまり、仕事がなくなったとして代わりに金をもらえばよいという話ではないということだ。働くことの経済的以外の意味がはっきりと現れた。リアルでの機会が失われても、リモートやSNSで情報・サービスが提供されたのは、そちらの意味が重かったからでもある。

働くことの意味について生じたいま一つの事柄は「エッセンシャル・ワーカー」の語の定着であ

る。「必要不可欠な」仕事という表現は、平常時では容易に受け容れられなかったであろう。仕事に価値の差はない、どの仕事も社会には必要だ、市場経済では必要とされるから支払われているのだ、というように。だが、今回の非常時にあって、「社会を支える仕事」の観念は抵抗なく語られるようになった。その仕事の多くはサービス労働である。医療関係者をはじめサービスの原義である奉仕に近い献身的な働きがあった（今も続いている）。

「支える」ということでいえば、これまで正面から口にされることの少なかった「人の役に立つ仕事につきたい」という言葉が若い人から率直に聞かれるようになった。「やりたい仕事」を社会的なつながりの中で考えるということだ。パンデミック下のオリンピックでは、アスリートたちから「多くの人に支えられた」という感謝の言葉を聞いた。

企業では在宅勤務が広がり、人々が自分の仕事と向き合う機会が増えた。「エッセンシャル・ワーカー」という言葉を耳にして、多くの人が自分の仕事は不可欠なのかと一度は問うたのではないか。たとえ不可欠ではないとしても、それは社会にとって必要な仕事なのか、どんな意味のある仕事なのかと。

コロナ禍で現れた「働くことの意味」の諸層を見失わないようにしよう。そして、これからも問い続けていこう。この仕事は不可欠か、必要なか。人の役に、社会の役に立っているか。この仕事には意味があるか、どんな意味があるのか、の問いだ。

(すぎむら・よしみ 甲南大学名誉教授)